

身体技法，イコン，洗礼や聖体礼儀といった典礼をも観想言語に含めて考察される点や，ヌース・質料・エネルゲイアといった鍵概念を軸に，古代ギリシア哲学思想から末期ビザンツキリスト教・哲学思想に至るまで見通せる点も，他の著作にはほとんどない本書の大きな特徴であり魅力である。必要に応じて参照されるトマスの議論も，表面上の安易な比較を警戒しつつなされた慎重かつ説得的なものであるように思われる。本書が東方キリスト教思想研究を志す者にとってはもちろんのこと，トマスやギリシア哲学（とくに新プラトン主義思想）に関心を寄せる者にとっても，通常「近くて遠い」と思われがちな東方キリスト教思想を理解するための手掛かりとなる極めて有益な書であることを書評子は確信し，多くの読者に恵まれることを願う。

八巻和彦著

『クザーヌス 生きている中世：開かれた世界と閉じた世界』

ぶねうま舎，2017年，509頁，ISBN: 978-4-906-79168-2, A/5, 5,600円

宮本久雄

はじめに

本書は八巻氏がN・クザーヌスの思索と実践を深く背景・根拠としながら，人間と自然が疎外されている現代において「他者」との出会いを構想し，その実現の道標を示している壮大なスケールの書である。副題は，人間が相生¹⁾・居住できる「閉じた世界」とそれが他の「閉じた世界」と交流する「開いた世界」への越境も「他者」との出会いの道筋を示しているといえよう。本書評子は大概そのように本書の核心を捉え，それをふまえて本書の荒筋を辿りつつ，書評子の感銘を受けた点や私見などで補足的にコメントしていきたい。

1) 書評での用語「相生」は「相生かし相生され相生く」の意で「共生」よりも深く他者との絆を示す語として用いられている。

一 破局の諸相

八巻氏が現代の破局の典型的な相として挙げるのは「フクシマ」という原発破局である。このカタカナの「フクシマ」という表現には、スリーマイル島原発事故やチェルノブイリ原発大事故などが含まれ、福島原発暴走を今も支えている原子カムラや原子力安全神話および科学技術、そして被災者の人々、さらに核拡散などの危機にさらされる将来世界がたたみ込まれている。と同時にその「フクシマ」を克服して他者との相生の地平をどう披いていくかという課題がそこに示されているのである。その課題の引き受けこそ、八巻氏の（中世）哲学や歴史的文明的ヴィジョンを背景にした本書に他ならないといえよう。

破局の二番目の相は、「現代日本におけるアイデンティティの分裂」（第二章）に窺えよう。氏はこのアイデンティティの分裂や喪失を、日本における過剰不安症候群に見出す。この不安の顕著な現れは、新々宗教（オウム真理教、幸福の科学）に見出されうるし、「不安産業」（健康への不安に対処するドラッグストア、子育てや進学に対処する子育て講座や進学塾等々）の拡大もその指標である。日本人の場合、特に母性的なるものへの集団的甘えによってそのアイデンティティを形成してきた。母性的なるものとは恵み豊かな自然であったり、戦後日本を保護したと見える「アメリカ」であったりする。しかし、今やその自然もフクシマで荒廃し、日本はアメリカにすり寄ろうとしてもつき離されている等して最早、日本人の集団的・個別的甘えは通用しないのが現代なのである。そこに日本のアイデンティティの破局が現前してくる。それにどう対処できるのであろうか。危険な対処の典型は、安倍政権のイデオロギー的背景である「日本会議」が掲げる「明治（憲法）」への回帰志向である。それは神人天皇をいただく戦前レジームの復興ともいえる。ところが八巻氏はこれと逆向する行動をとる現・明仁天皇および美智子皇后に注目する。御両者は沖縄やペリリュー島、フィリピンを訪問し第二次世界大戦の犠牲者を慰霊したり、福島^{ひら}の被災者に同じ目線で語りかけ、足尾鉍毒関係の場所を訪れたし、正に日本国憲法の平和希求の精神の体现者といえるからである。

こうした日本のアイデンティティ分裂の克服のため八巻氏は、日本も含めた東アジア共同体の構想を提案している。書評子もその構想にささやかに寄与しようと、韓国のガンジーと謳われたハム・ソクホン師の相生精神を継承するシリアル（民衆）共同体を中心に様々な人々と相生を希求したり、シンガポールで戦時中

日本軍の犠牲となった人々の子孫との和に向けての^{まど}円いを形成しようとしたりしているが、こうした日本人一人ひとりの小さな他者との交流が今こそ求められているといえよう。

以上のような現代世界の破局に関して忘れてはならないのが、根源悪の現象としての「アウシュヴィッツ」強制収容所であろう。そこは、「生きる資格のない人」とされ人間の他者性を奪われた人々が焼却された「忘却の穴」だからである。

こうして次の問いは「他者の衝撃」という題の下に展開される他者論に関わっていく。

八巻氏はそこでコンスタンティノープルの陥落（1453年）という破局に直面したクザーヌスが、タタール人という他者をどのように見出したかを語る。当時クザーヌスは『信仰の平和』の中で宗教迫害の残虐性の主原因は諸宗教・諸国民の間での儀礼の多様にあると考えた。そこで彼は著者の中で使徒パウロとタタール人知者との対話を設定し、神への信仰と愛の律法とが確立されるなら儀礼の多様は最早重要でないと結論づけるのである。

こうしてクザーヌスは破局を通して、当時完全な奴隷・物とみなされていたタタール人を他者として見すえるに至った。次に「他者概念の特質」において八巻氏は、自己のアイデンティティが重層構造を秘めるのに応じて他者概念も変化するという。われわれの関心を引くのは、「自己の内部にいる他者」であり、それは良心であったり、サタンの心であったりしよう。しかしここでH・アーレントに言及すると、全体主義に抵抗できる人格とは、自己の中にもう一人の対話相手を持ち、正しく状況を判断できる人だという点である。八巻氏はさらに「神という絶対的他者」を挙げる。氏によれば神は人間の接近不可能なものであるが、逆に人間相互の他者としての交わりを成立させている場としての不可視の他者として理解される。また移民、殊に難民が他者として際立ってくる。ここで書評子がコメントすれば、H・アーレントのいうようにあらゆる集団（国家、民族、自治体など）への登録を剥奪された難民は、生命権、財産権などの基本的人権を失った他者である。難民はその意味でE・レヴィナスのいう裸の、暴力にさらされた「顔」であり、「殺さないで」と訴えかけてくる言葉といえよう。その言葉こそ他者であり、それに応える（répondre）ことが究局の責任（responsabilité）なのである。こうして他者は、わたしの自閉的自同を衝撃的に破り相生の地平を披く。それも破局の只中において。

次に西田幾多郎とクザーヌスとの出会いの章にふれてみたい。というのも西田の晩年は第二次世界大戦の悲劇の只中で過ごされ、そこで彼は終生の金字塔的論文「場所的論理と宗教的世界観」を著し、クザーヌスの思想の核心「無限球のたとえ」と絶対矛盾的自己同一とを解釈しているからである。

それでは無限球とはどのようなことなのか。無限球は、球として限界をもたず無数の焦点をもつ世界である。その各焦点は世界を映すと共に、無限な世界の自己表現の一立脚点である。これに対して西田の言う絶対矛盾的自己同一とはどういうことであるのか。八巻氏はそれに応えて西田を引用している(270頁)。「世界は絶対矛盾的自己同一的に、絶対現在の自己限定として、自己の中に焦点を有ち、動的焦点を中心として自己自身を形成して行く。……〔他方、〕我々の自己は、かゝる世界の個物的多として、その一々が世界の一焦点として、自己に世界を表現すると共に世界の自己形成的焦点の方向に於て自己の方向を有つ。……〔これは〕永遠の過去未来を含む絶対現在の中心となると云ふことである。私が、我々の自己を、絶対現在の瞬間的自己限定と云ふ所以である」。このように無限球と絶対矛盾の自己同一的世界は重なって、世界と自己との関係を見事に表現している。そしてこのような無限球の場において八巻氏が命名する「楕円の思考」が実現する。すなわち、円形の中心における思考の主体・焦点である各人が、対立する「他者」から学び交わるにつれ互いに接近し、二つの円であったものが、一つの楕円の中の二つの中心点を形成する。こうして両者は協和相生関係に入るわけである。書評子にはクザーヌスの無限球内で刻々とこのような出会いが生起し、西田流に言えば場の自己限定として「我と汝」の関係が刻々と実現しているように思われる。他者との出会いの衝撃は生起し続けるのである。西田の場合、この出会いはさらに「逆対応」という形で実現する。これを書評子流に言い直せば次のようになろう。すなわち、われわれは直接神と出会うことはありえない。一方でわたしは、神の愛せよとの命にさらされ、利己的自己の重なる否定を通してこれに応えようとするが、そこに無力・無能でしかも罪業深重な自己を見出さざるをえない。今や神の憐れみを乞うて祈る他にはない。他方で神は、その絶対不動永遠の場から自己否定してサタンまでも担う勢力で受肉し、自己無化を重ね、逃亡する人間を追いこれを包む。この絶対の慈悲と憐れむべき人間の弱さが契合するのは、両者各々の自己否定を媒介にする対応・出会いであり、それが逆対応といえよう。以上は仮のたとえであるが、それも破局の一つの相の只中で生起す

る他者の衝撃事件なのであろう。

こうした他者との相生の拓けに臨んで八巻氏は「大きな物語の改訂」を提案する。ここにいわゆる大きな物語の一例としてアメリカの「明白な運命」が挙げられている。アメリカの伝統にあつては、自由の領域の拡大が神の摂理であるという信念と、この摂理の実現のためアメリカが選ばれた国家であるという主張の二本の柱が核心をなすという（西崎文子説）。それはアメリカがかかえる大きな物語でそれによって南北戦争から反共政策を通じ反イラク湾岸戦に至るまで自己のアイデンティティ保持の歴史を形成してきたのであるが、それが却って他の文化や民族圏に災厄をもたらし、アメリカ国内に分裂をもたらしたのも事実といえる。本邦では上述の通り「日本会議」の影において旧憲法の復権、『国体の本義』や『臣民の道』²⁾の回復を目指す古い大きな物語が語られているといえる。これに対し、現天皇および美智子皇后が体現する今日の憲法も大きな善き物語であり、東アジア共同体の創設を目指す八巻氏の物語も改訂される大きな物語であろう。氏は「大きな物語」の内実について次のように述べる。「狭くなりつつある地球上で出会う〈他者〉、〈異なるもの〉に対して、単なる寛容のみならず根源的な信頼を保持する勇気を持ち、その結果としてそれがもたらす〈開かれ〉と〈豊饒性〉を信じつつ、暴力に頼ることなく〈平和な世界〉を追求し続けるという物語である」(390頁)。

本書の終章では「現代に生きる中世」がテーマとなっている。「現代に生きる中世」という場合、(1)「現代において活用されている中世の思想的所産」と(2)「現代においてこそ必要とされる中世の思想的所産」の二義が込められているとされる。そこで前者(1)の肯定的特色を捉えようとして八巻氏はまず「科学・技術と中世」を問題にする。科学技術関係ではローマ教皇庁のガリレオ・ガリレイに対する異端審問の話に人は目を奪われ、キリスト教の反科学性が常識とされている向きもある。しかし広い視点では数学や経験科学を重視したロジャー・ベーコンや唯名論を推進したオッカムのウィリアムなどは近世自然科学の成立を準備したといえる。また現実には存在しえない条件文・反事実的条件文 (counter-

2) 書評で挙げた『国体の本義』(昭和12年刊)と『臣民の道』(昭和16年刊)はいずれも当時の文部省の編纂になる書である。その内容は、日本は天皇を頂点とする皇室を宗家と仰ぐ一大家族であるので、個的人格を基盤とする西欧的民主主義やキリスト教は、国体の本義や臣民の道にそぐわないということである。

factual) が当時の自然哲学者に自然学的想像力を豊かに展開させた。例えばニュートンが慣性の法則「すべての物体はそれに加えられる力によってその状態を変化させるように強いられなければ、静止状態か等速直線運動を続ける」を発想しえたのも、先の反事実的条件文の思考実験の結果なのである。書評子もかつては大学の科学史の講義（伊東俊太郎教授）において、中世を通して伝承展開された新プラトン哲学は、善のアイデアの子としての太陽を宇宙の中心とする故に、天動説から太陽中心の地動説へのパラダイム変換に一役買ったとの講義を受けたことを覚えている。

続いて近代の代表民主主義の成立に近世が果たした諸要因も様々である。そのうちの一つであるクザーヌス著『普遍的協和について』は、平等、自由、公会議の至上権、個人的同意、多数決などの必要性にふれ、中世から近代的な法治主義的体制確立への連続性を示している。書評子はまたドミニコ会の会憲が推進する選挙制にも注目している。それは民主主義の先駆けとなるものである。また一三世紀初頭までに成立したパリ、ボローニャ、オックスフォードなどの大学は、科学技術成立の温床となっただけではなく、国際的なレベルで学生を集め、討論を中心とした知的訓練を施したことで知られる。その討論の訓練は民主主義の熟議的性格を養成した点で政治制度にとって歴史的重要性をもっている。本書は全体にわたって膨大な資料を駆使しているので書評子はそれを読者に示しえないという恨みをもつが、特に「現代に生きる中世」の章においてはそうである。次に(2)「現代に生かされるべき中世」のテーマを紹介したい。八巻氏はそのテーマに入る前に現代を生み出した三つの思想的骨格を提示する。合理主義、人間中心主義、個人主義の三点である。そのうち人間中心主義は、プロメテウスの火を用いた人間がやがて産業革命を興し、神のごとく自然と諸民族を支配し、逆に人間自身の未来を滅亡させる危機の只中にあるという悲劇を招いている。個人主義もデカルト的理性そのものであり、全き自由を獲得した人間が、逆に歴史や文明を創造してゆく自由に耐え切れず、その自由を独裁者に委ねて大衆化し、そこに全体主義が成立するという逆説的な結果を招いたのはつい最近のことであり、その危険な無責任的個人主義は今日でも密かな力をため込んでいる。

われわれの関心は合理主義に関わる。トマスやクザーヌスなどの中世的認識論においては、知性 (intellectus)、理性 (ratio)、感覚 (sensus) という上から下への三機能の相互作用によって認識が成り立つとされた。ところが近世以降では、

知性と理性が切り離され、カントにみられるように理性論が主流となる。その場合の理性は、対象を量化し数式化し制御し、技術と結びつけて利用するという計算的道具的理性を意味する。フッサールも指摘するように（『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』）こうした理性が生活世界の忘却を招く物理科学的世界像を構築する決定的な契機となったわけである。ここでいう生活世界とは、われわれが日常言語を用い、意思疎通して住み、文化を形成しながら、また新しい言語を生み、新しい文化を創造しつつ相生してゆくゲマインシャフト的な世界といえよう。本来この生活世界が地盤となって客観的・科学的世界が構築されるわけであるが、理念化され数学化された物理科学的世界がそれをおおい隠してゆく。例えば東京などを見れば、大地自然がコンクリートでおおわれた人工的外観の下に、コンピューターで生活が操作された物理科学的に刻印された人工的空間となっている。

この理性に対し、知性とはどのような役割を果たすのであろうか。例えばトマスは、「知性の受胎にまず第一に入るものは〈在るもの〉(ens)である。というのは、『形而上学』第九巻にいうごとく、何ものも、それが現実的である限りにおいて (inquantum est actu) 可認識的だからである。この故に ens が知性に固有な対象であり、そういうわけで第一の可知的なものなのである」(S. T., q. 5, a. 2, c.) と語っている。中世の実在論はこの現実的リアルな ens を基に、存在のアナログアの世界を展望し、様々な他者に出会い、存在そのものの神を否定神学的に望見したことは周知のごとくである。この点について八巻氏は次のように述べる。「[理性]の「開かれ」るべき方向は、他の人間、動植物等の〈他者〉に対しての〈開かれ〉という意味での水平方向のみならず、いわば垂直的にも、つまり〈超越〉に対しても「開かれ」た理性であるべきだろう」(414頁)。そして氏は超越的他者からの視線を以て自・他に気づく用意を説く。このような水平・垂直方向に開かれた理性は、「立体的に」開かれた理性であるという。

以上のように中世において intellectus は、他者のうちに耳をすます (intus-legere) という能力として超越者・神に耳をすます。それではその超越の次元の開けは人間にとってどのような意義をもつのであろうか。一つはあらゆる人間が超越的でかけがえのない存在だということである。それをさらに言うならば、全体主義は勿論、国家、民族、企業などどんな集団も個的人格を支配したり抹殺する権限をもたないということである。ナチスはその優生学的人種的偏見の下に障

害をもつ子供たちを抹殺したが、それは超越性を秘める子供たちの根源的他者性の抹殺に他ならなかった。

最後に八巻氏は中世の精神性を次の三点に要約して語っている。「第一にそれは、人間にとっての不可知なものの存在を認め、第二にそれは、人間存在の限界と弱さを十分に自覚しており、第三にそれは、個人の脆弱さと〈他者〉の力の必要性とを弁えているというものなのである」(415頁)と。この精神は勿論N・クザーヌスの精神であることは言うをまたないであろう。

むすびとひらき

本書は、クザーヌスの精神に導かれた八巻氏が、中世の立体的な理性の眼力をもって、自己も含め他者への開かれの諸相を見事に開陳したメッセージといえる。しかもこの他者が、他者抹殺を加速する「現代」の只中にある以上、氏の戦略は哲学・神学だけでなく、政治・経済、科学・技術、アジア・欧米、文明にまで及ぶ壮大な領域に広がっている。その領域の正体を精緻な資料分析を以て暴きつつ、他者に関わるある開かれ・提案を示す手法は見事という他にない。その提案の中でも書評子の関心を引いたのは、書評子もそれについて思索してきた「大きな物語の改訂」というテーマである。

書評子は従来から「小さな物語」の掘り起こしに従事してきた。アイヌや女性、ネイティブ・アメリカン、水俣、賢治、韓国の東学党、シンガポールの日本統治時代の話、カタリ派等々についてである。そしてその小さな物語群から何か大きな物語や他者論を抽象して統合するという作業とは逆に、それらの物語を他者という視点でアナログ的に一つ一つ辿り見てゆくという作業を続けている。それは各々の物語から他者との出会いに向けてのエネルギーを授与されることであり、そのエネルギーを体現していく人々との相生を展望して生きることにも連動してくると思われる。この作業をクザーヌス的に語れば、小さな物語が無数の焦点となる無限球という大きな物語の相生とでもいえようか。

最後に本書が中世哲学会の書評にとりあげられることは、絶大の意義をもつと断言できる。というのも、中世が過去から未来に四通八達の勢いで甦る見本が本書であり、加えて中世哲学の研究者諸氏自身が中世から甦って各々の前線で根源悪の諸現象に立ち向かいつつ、他者の開かれに向けて思索・実践をするよう招く招きが本書だからである。